

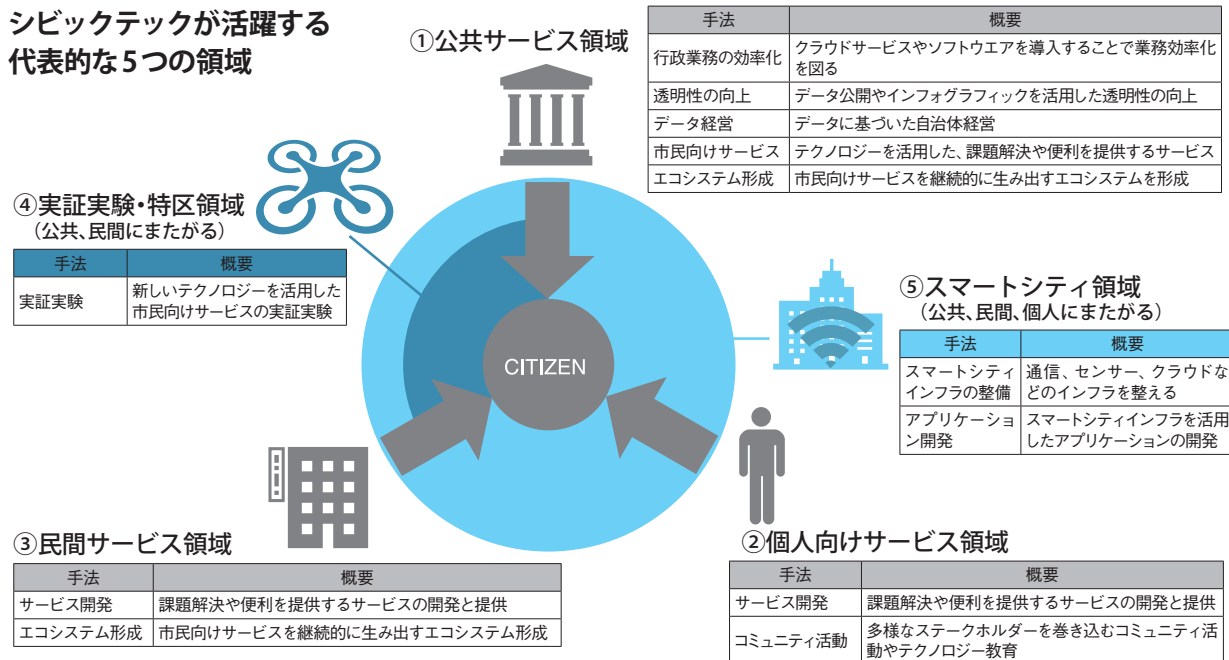
#08 CivicTech (市民とテクノロジー)

COVID-19を機に、地域社会の課題解決に向け、若い世代も積極参加

取材
協力

福島 健一郎氏 一般社団法人シビックテックジャパン 代表理事
伴野智樹氏 一般社団法人シビックテックジャパン 理事

シビックテックが活躍する 代表的な5つの領域



※伴野氏が定義する「シビックテック5つの領域」をもとに編集部が作成

新型コロナウイルス感染症の拡大により、地域の活性化や社会の課題に対し、テクノロジーを活用して解決するCivicTech (シビックテック)の活動が注目されている。例えば、市民が中心となって行政と力を合わせ課題解決に取り組んだ、東京都の「新型コロナウイルス感染症対策サイト」や神戸市の地域課題解決プロジェクト「Urban Innovation KOBE」、身近な地域でのテイクアウトマップが挙げられる。

シビックテックは公共・民間サービス・個人との関わり方によって、5つの領域に区分される。近年では、教育や公共交通、少子高齢化による人口減少等の課題に対し、地域の住民たちが積極的に取り組んでいる。

「社会の課題を意識した資金拠出等、ESG投資を行う企業の奉仕活動も増えてきました。また、実証実験を行うために、行政と民間が共同で資金提供者を探し、ローカルな社会課題を解決する『ソーシャル・インパクト・ボンド』の仕組みも広がっています」(伴野氏)

シビックテックジャパンが主催する「CIVIC TECH FORUM ONLINE 2020」では、16歳の高校生や大学生も積極的に参

加。Webサイトを作るために自治体と交渉し、運用しやすいフォーマットや体制を提案するなど、大人顔負けのパフォーマンスを示していたという。地域社会の課題を技術で解決するには、エンジニアリングスキルは欠かせない。だが、そのアイデアを形にするには、さらに必要なスキルがあると福島氏は語る。

「10年20年先を見据えた社会の課題を解決し、イノベーションを生み出すためには、若い世代のITリテラシーが必要です。さらに大事なのは、その技術がどのように人々の生活を進化させるのかを企画側と開発側が共感しながら対話できるスキルです。そのためには、スマートフォンやSNSが浸透する前と後では人々の生活にどんな進化があったのかなど、これまで社会を進化させ、便利にしてきた歴史を学ぶことが役立つでしょう」(福島氏)

対話や共感力を通じて、サービスや課題に適したエンジニアリングを当てはめていく。こうしたスキル・知識は、シビックテック以外でも役立つに違いない。



(文・馬場美由紀)